

The Gallery voice NO-63

編集・発行／ 画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 番地／TEL (098)888-6117 / 2021.9.15
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa · Japan www.galleryokinawa.com

心の琴線に触れるものを

倉成多郎

琉球王国時代の焼物に作者が名前を入れるという事は相当に珍しい事で、思いっただけでも 2 例ぐらいしか知らない。戦後になってもこの大勢は変わらず、多くの壺屋陶工が自分の作品にサインを入れ、桐箱に納めるようになったのは 70 年代以降ではないか。

1940 年代から 60 年代の壺屋焼の作品については十分に研究がされているわけではない。当時のことや作品について、聞けば教えてくれた人たちも少なくなり、その知識や経験が十分に次の世代に継承されているわけではない。



今回のオークションに小橋川源慶のカラカラと碗が出品されている。源慶さんは「ゲンケイ」というカタカナの印を押すことが多いが、この作品にはサインがなく来歴から判断するしかない。2 点あるカラカラは、二つとも同じサイズで、轆轤をひきこなした熟練の陶工が作ったモノだろう。持ちやすいように肩が平になるくらい扁平に作るのも、泡盛を注いだときにしずくが垂れないように酒の入れ口と注ぎ口の高さを合わせてあるのも、作者がものの道理を理解している証拠だろう。碗は、真っ青に発色するはずの酸化コバルト釉に黒釉が混ぜてあり色調が抑えてある。戦前よく行われていたようで、金城次郎も同様に色調を抑えることをしている。日々、食卓で使う碗として控えめの色は食材が映える。碗もカラカラもクリーム

色の色調は壺屋焼の優しい白化粧で、ガス・灯油窯ではなく、薪を使う登り窯での焼成の特徴が出ている。カラカラの肩に少しついているガサガサは窯の壁が少し降り付いたものだ。



60 年代までの無銘の壺屋焼は、作者名などの指標や情報が少ない分、モノそのものと向き合いやすい。かつての松田聖子のように、ビビビときたらそれは運命なのだろう（時々その運命は破綻するけど）。ゲンケイだから、ジロウだったら買うのではなく、物に心を奪われて買ったならゲンケイだった、ジロウだった、という買い方のほうが僕には格好良く見える。

柳宗悦の至言に「見て知りそ 知りてな見そ」という一文がある。見て知りなさい、知ってから見てはいけないという意味だが、なかなかできることではない。前情報なしに、作品そのものと向かい合い会話をし、気に入ったら手に入れるというだけなのだが。作者を知ったら、値段を聞いたなら、或いは博物館のガラスケースの向こう側にあったら、急に作品が輝いて見え始めるのが人間だが、それをするなということ短い一文で戒めてくれる。

1960 年代までの無銘の壺屋焼を買おうとすると、半ば強制的にそういう状況に置かれるのだが、何を盛ろうか、どこに飾ろうか、なにに使おうかを考えながら積極的に向き合うのは、とても面白い遊びだと思う。「これを知る者はこれを好む者に如(し)かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。」論語の一節だが、知るより好きが勝り、好きより楽しむが勝るといふ。知識ではなく心の琴線に触れるものをおいかける遊びを、みんなで楽しんでみませんか。

(くらなりたろう/壺屋焼物博物館学芸員)

視線を誘う仕掛け

亀海史明

The Gallery Voice No-63.2021.9.15 画廊沖繩

木陰に隠れた暗がりのなかから、砂地を思わせる明るい水辺が見える。遠景は湿度を含んでいるせいか、霧がかかったようにぼんやりとしている。水辺に通じる道には轍が残っているが、砂地と同じ色が描かれている。つまり、ここを通り過ぎたなんらかの車は砂辺の向こうからこちら側にも向かってきたのではないかと、とも考えることが可能になる。

同じように轍を描いた與那覇朝大の作品《射影》(1980年、沖縄県立博物館・美術館蔵)は、手前の地面の色が向こう側に向かって伸びているように描かれている。これは車が遠景に向かって行ったことを示唆する。つまり、本作とは真逆なのである。



與那覇朝大 油彩/P20号・平成元年

與那覇朝大は、細部の描写にこだわった、いわゆる写実的な絵画を得意とした画家である、とされている。しかし指摘しておきたいのは、朝大は、細部をどのように「観る」のか、ということにも十分にこだわっていたのではないかとということである。その場合、描写とは、単に現前するものを正確に描き写す、ということに留まらず、作家がその対象を観ようとしたときに現れた積極的な態度を画面に描き加える、ということをも意味し得る。朝大作品を前にした時に感じる奇妙な感覚は、写実性という観点からは過剰ともいうべき筆致や色使いで描かれた細部が、視線を誘う仕掛けになっていることから生じているのではないかと。われわれはその細部に誘われ、大胆な構図で仕切られた画面のなかを行きつ戻りつしながら、時折ふと全体に眼を向け、再び細部へと進んでいくのだ。

改めて本作に戻ろう。明るい水辺の景色は、線のような輪郭によって描かれた木の幹によって遮られている。遠景を大胆に遮るように近景を描くのは、朝大作品のおもしろさだと思う。《射影》もまた、異様な存在感で迫ってくる石垣に遮られ、遠景は凹の字に区切られた向こうに見えている。明暗もはっきりと分かれているため、厚い雲に覆われながらも近景には部分的に陽が差したような場面にも見え、これから奥の方に進めば悪天候に居合わせるのではないかと、ということをおぼせる不安感がある。いっぽう本作は、遠近の風景が対立しておらず、調和した様子である。暗がりから明るい水辺を眺めているのであっても、そこはさながら好天のようだ。そして轍が向こうから刻まれているとすれば、遠景が手前に「侵入」していることになる。そのことがかえって、われわれを向こう側に導いているようにも思える。轍が観ることを、つまり動作を想像させる言い方でいえば、画面の奥に向かって進むことを掻き立てるのである。本作は、他作のような大胆さはやや影を潜めているが、不思議な魅力を持った絵画であるといえ、朝大の作品が持っている特徴を十分に備えた一点だと考えられるだろう。

(かめがいふみあき/沖縄県立博物館・美術館学芸員)



與那覇朝大 「水差し」

玉那覇正吉が灯すランプの燈

田原美野

長引くコロナ禍で、非対面、非接触が日常となる中、とりわけ「彫刻」という立体物が空間に放つ力は、決して小さく無いように思う。戦後の沖縄で、彫刻家、また画家としても活躍した玉那覇正吉(1918-1984)は、ひめゆりの塔の「乙女像」や百合のレリーフを始め、一中健児の塔の「健児像」など、沖縄戦で亡くなった多くの若人を弔う慰霊碑を設計、制作したことで知られる。

1918年、那覇に生まれた玉那覇は、養母の元で成長する。苦勞して東京美術学校彫刻科に入学。そこで出会った彫刻家・石井鶴三から「芸術の尊さ、真の人間とはいかなるものであるか」を教わったといい、生涯の師と仰いだ。戦時中は航空隊に所属し、作業に従事。1946年に帰郷後、暫くして、首里に建設されたアート・コロニー、通称「ニシムイ」で活動を始める。当時の玉那覇と米軍医の交流が、小説のモチーフとなって描かれることから、玉那覇がハートフルで社交的であった一面がうかがえる。しかし反面、多くの美術家がそうであるように、制作姿勢は厳しく、仕事の相手に対しても道理を持って接する人物だったという。画廊主上原とのやり取りに、こんなエピソードがある。画廊開業間もない1982年、『現代沖縄絵画50人展』を企画し、そこで作品を展示販売させて欲しいと承諾を得るべく、大山にあった玉那覇のアトリエを訪れた。玉那覇は快く作品数点を預かせてくれた。しかし預かった作品全てを売り切ることができず、うち何点かを後日お返しにいくと、「画廊たるもの、一度画家から託された絵を返しに来るとは、何ごとか。」と言われたという。玉那覇の描くことに対する真剣さに加え、それを扱う画廊に対し、画家の美術表現を引き受けることの厳しさを当時35歳の画廊主は教わったという。

キャンバスには、黒や紺色のダークトーンを塗り重ね、戦後焦土と化した沖縄の荒廃した姿を投影するように廃船を描いた。くたびれた船と同じサイズで描かれるジーシガーミ(厨子甕)は、沖縄の地に沈められた御霊へのレクイエムだろうか。眼前に横たわるイクサの残骸や、聞こえるはずのない死者の声を、芸術家の造形感覚で捉えようとしたと思われる。中でもランプは、炎の赤を中心に据え、背景とのコントラストで一層際立っている。ランプについての玉那覇の記述がある。

「私が学生時代に故郷を離れ、一人夜汽車の中で眺めているとき、闇の中に燃え続けるランプの明かりが非常に印象的に映ったものであった。それ以来、私の絵にはランプの明かりが一つの重要な位置をもつようになった。」



玉那覇正吉「燈心」油彩/ M12号・1975年

自らの芸術表現に対する源泉を絶やさぬがごとくランプに灯る炎を描き続けた玉那覇正吉。安谷屋正義(1921-1967)の「塔」がそうであるように、沖縄の厳しい現実を受け入れながらも、「願い」や「祈り」にも似た、希望の「燈」としてのランプが、そこにあったのではないだろうか。沖縄近代彫刻の礎を築いたと言われる芸術家の創作は1984年病を患い66歳で幕を閉じた。大学教授という職務を全うし、後進の育成に努めた後、退官後は、時間の制約から解放され、心ゆくまでの制作を、楽しみにしていたという。もしもそれが叶えられていれば、平面絵画で展開されたモチーフの抽象化は、立体彫刻にも点火し、造形に再び命を吹き込み、新しい玉那覇彫刻がみられたかもしれないと、夢想してしまうのである。

(画廊沖繩スタッフ/たはらみの)

第24回美術オークション 出品一覧

The Gallery Voice No-63.2021.9.15 画廊沖繩

1		小橋川源慶	急須セット
2		小橋川源慶	水差し
3		小橋川永弘	茶碗
4		島袋常明	カーミ
5		小橋川清次	花器
6		國吉清尚	湯呑み
7		島袋常明	四つ耳大壺
8		中川伊作	重要文化財 旧松本家住宅
9		玉那覇有公	型絵
10		宮城智	竹葉紋壺
11		仁王	赤絵壺
12		島袋常明	龍巻カラカラ
13		具志堅聖児	菊大輪
14		清水晶一	壺屋の登窯
15		名渡山愛擴	ヨットハーバー (宜野湾)
16		屋良朝春	風景
17		赤嶺正則	青い目の人形
18		城間喜宏	宇宙と無限
19		与儀達治	栗と急須
20		翁長自修	景象
21		喜久村徳男	いぶき
22		大嶺信一	海
23		平良晃	平安座の民家
24		大見謝文	風景
25		中島イソ子	少女

26		与那覇朝大	風景
27		服部讓司	ブーゲンビレアの道
28		小橋川源慶	カラカラ 呉須
29		小橋川源慶	カラカラ 白釉
30		小橋川源慶	平土瓶
31		小橋川源慶	マカイ ペアセット
32		國吉清尚	ビアカップ
33		與那覇朝大	水差し
34		島武巳	花生
35		仁王	お猪口 5個セット
36		儀間常照	緑釉大皿
37		J.HOOK ジョアン・フック	バリアリーの パイロット フィッシュ
38		玉那覇正吉	燈心
39		ウルバン・ウシェ	パリのカフェ
40		金城次郎	酒器セット 泡盛古酒付
41		当真裕爾	酒器セット 泡盛古酒付
42		具志堅全心	酒器セット 泡盛古酒付
43		金城明一	青いエメラルド色の 二階家
44		儀間比呂志	舞姫
45		儀間比呂志	真南風
46		小橋川清正	花入
47		ポール・ロリマー	花瓶
48		徐葆光 (拓本)	中山第一
49		金城次郎	徳利
50		島武巳	徳利